

200万語の多読を授業外で 達成した大学生の事例研究

吉 田 弘 子

要旨

本稿では、1年4か月間に授業外で200万語を超える多読を達成した非英語専攻の女子大学生の事例を、多読記録とメール及びインタビューでのやりとりをもとに報告する。彼女は大学入学後に独力で多読に挑戦したが、継続できなかった。そこで、3回生の春学期に大学内で多読指導を実施している筆者にアドバイスを求めた。筆者の助言の下、易しい英語本から読むことをスタートし、多読の記録を自発的に筆者にメールで送付した。筆者は送られてくる多読記録に目を通し、フィードバックをメールで返す方法で指導を繰り返した。メールでの多読記録提出は9回に及び、対象学生は3か月で約16万語、6か月で40万語、1年で140万語と読み続け、1年4か月後には2,191,609語（YL2.6レベル）を読了した。その結果、5000語の長さの本であれば2冊程度まで一気に連続して読了できるようになり、200万語を読み終えた大学4回生の12月に実施したインタビューでこれまでの多読経験を振り返った。対象学生が授業外多読で200万語以上を読破できた要因を検証した結果、易しい本からスタートするという多読法（古川, 2021）を用いたこととGuthrie and Wigfield (2000)のリーディングエンゲージメントモデルの複数の要因が多読の成功に影響したことが明らかになった。中でも特に教員の多読指導の知識、適切な励まし、称賛や多読本へのアクセスが成功への大きな要因となったことが示唆された。

キーワード：多読多聴，事例研究，SSS（Start with Simple Stories）多読法，
リーディングエンゲージメントモデル

1. はじめに

多読がL2学習者の語彙力、流暢性、ライティング、リーディングの向上につながることは、多くの研究で示され、多読が英語学習の有望な指導方法であることを示唆している。（Al-Homoud & Schmitt, 2009; Barber, 2014; Beglar, Hunt, & Kite, 2012; Iwahori, 2008; Robb & Kano, 2013; Tudor & Hafiz, 1989; Yamashita, 2008）。しかし、これらの研究の多くは、学習者グループを対象として多読の効果を検証しており、個々の学習者がどのように多読を経験するのかについては明らかにされていない。したがって、個人の多読のプロセスを促進する要因については、まだ十分に検証されていない。そこで、本研究では16ヶ月間に教室外で200万語以上（1990冊）の多読に成功した一人の学習者を調査し、個人の多読経験の詳細を明らかにする。なお、これは縦断的事例研究の一種で、すべてのデータを事後

的に収集する回顧的事例研究 (Mills, Durepos, & Wiebe, 2010) である。

2. 先行研究

多読の結果、読解力が向上することは多くの研究で実証されている。Lai (1993) は、香港で4週間の多読プログラムを実施し、中等学校の生徒に平均16~18冊の英語学習者向けに書かれたテキストを読ませた。その結果、多読は7年生から9年生の生徒の読解力を向上させたことが明らかになった。同様に、Hafiz and Tudor (1989) は、3ヶ月の多読プログラムに参加したパキスタンの子どもたちが、読み書きにおいて対照群を上回ったことを示し、多読の効果を確認した。

高校生や大学生に対する多読の効果については、多くの研究がなされている。例えば、Iwahori (2008) は、日本の高校生を対象に、7週間にわたってグレーデッドリーダーを読ませる研究を行った。この研究では、事前テストと事後テストで生徒の言語能力を調査し、事後テストのスコアが事前テストのスコアよりも有意に高いという結果を得ている。Robb and Susser (1989) は、1学期にわたって行われた多読が、精読よりも効果的に日本の大学1年生の読解力を向上させることを明らかにした。また、Mason and Krashen (1997) は、日本の大学生を対象とした研究で、多読グループのテスト結果が従来型の授業を行った対照グループのテスト結果より有意に向上したことを明らかにした。Al-Homoud and Schmitt (2009) は、サウジアラビアの大学で、多読クラスと従来のリーディングクラスを比較した。10週間後、多読クラスは、ケンブリッジ予備英語テストとPre-TOEFL試験のリーディングセクションを用いた読解力テストにおいて、従来のリーディングクラスより優れていたことを報告している。同様に、Mohammad (2014) は、ヨルダンの大学生を対象に、3学期にわたり多読の読解力への効果を調査し、その結果、多読は読解力、語彙力、文法の向上に有効なアプローチであることを明らかにした。一方、Yamashita (2008) は、日本の大学の15週間のコースで多読の効果を調査したが、相反した結果を得た。この研究では、EPER Placement/Progress Test と EPER Extensive Reading Test という2つの異なるテストが使用されたが、EPER Extensive Reading Test では統計的に有意な向上が見られたが、EPER Placement/Progress Test では見られなかった。Yamashita (2008) はこの差は2つのテストが異なる言語特性を測定していることに起因するためと推測した。

個人の多読体験を調査する研究は事例研究としていくつか行われている。例えば、Leung (2002) は、成人の日本語学習のダイアリー研究を報告している。この研究では、多読が語彙の習得や読解力を高めるとともに、読書に対する積極的な態度を形成するのに役立つことを指摘している。Nishino (2007) は、2人の日本人中学生の2年半のリーディング戦略と動機に関する縦断的な事例研究を報告した。その結果、2人の中学生は様々なリーディング戦略を利用し、流暢に読めるようになるにつれてL2リーディングの動機が変化したことを報告した。しかし、これらの研究結果は、多読が読解力を高めることを示しているが、個々の学習者の読解経験に関する情報を明らかにするには至っていない。

3. 事例研究

事例対象者

本事例研究の対象者であるSは、私立大学に在籍する3年生で、日本語母語話者の女子学生である。2017年5月に筆者が初めて出会ったとき、Sはすでに必修の英語授業を終了していたため、大学で英語の授業を受講していなかった。Sは、中学校に入学してから英語を教科として学んだが、教室外では英語を使用することはない典型的なEFL (English as a Foreign Language) 環境で英語を学んだ。中学・高校の6年間は、主に文法・翻訳方式で英語を学び、試験のための英語を勉強することが中心であったため、英語を学ぶのにそれほど強い動機はなかったという。大学生になってから、Sは当時の受講していた英語クラスで多読を紹介され、多読が英語を日本語に訳すというこれまでの英語学習とは全く違う点に興味を持った。そこで彼女は当初独力で多読に挑戦しようと大学の図書館で多読本を選び読み始めたが、600語程度の本を読み続けるのは難しく、結局読むのをやめてしまった。その後、Sは大学で学生アシスタントのアルバイトを始め、そこで筆者の担当する多読授業を受講した数名と知り合いになった。その友人たちから多読を大学で実践している筆者の名前を聞き、多読についてアドバイスを受けるために筆者に一通のメールを送付した。それが筆者と本事例対象者となるSとの出会いの始まりであった。

データ

前述したように、本研究は、すべてのデータを事後に収集する回顧的事例研究 (Mills, Durepos, & Wiebe, 2010) であり、多読記録、電子メール、面談とインタビューの3種類のデータは多読終了後に分析した。表1にSの多読記録とその提出日 (2017年8月–2018年12月) を示す。

表1 多読記録とその提出日

多読記録 NO	提出日	読了冊数	読了語数
1	2017/8/10	92	8609
2	8/29	265	30761
3	9/14	379	54105
4	9/29	475	81095
5	10/16	698	155118
6	11/24	886	218696
7	2018/2/03	1220	409539
8	5/17	1630	875354
9	12/22	1990	2191609

多読記録

リーディングログの形式で記入された多読記録は、この研究の主なデータ源である。こ

れは、S が読んだすべての本について、日付、タイトル、本のシリーズ、難易度、語数、読書時間、興味度、簡単なコメントなどが記されたものである。リーディングログはA4用紙1枚に25冊の本を記録することができ、大学の図書館に備え付けられている。Sは、本を読み終えるたびにリーディングログに記録した。Sは当初は、英語力を向上させるためにはできるだけ英語を使った方がよいと考え英語でコメントを書いていたが、途中から英語で書くためにログ記入に時間をかけるよりも、より多くの多読本を読んだ方がいいという筆者のアドバイスに従い、日本語で記入するようになった。読書記録は、初回のみフィードバックを得るために筆者に直接持参した。しかしそれ以降はpdf ファイルをメールで筆者に送付するようになった。なお、Sは筆者と授業でのかかわりはなく、これらの提出を含む多読活動は、授業や成績とは一切関係なく、彼女が自発的に行ったものである。

電子メール

筆者とSは所属する学部が異なり、講義での接点はなかったので多読記録の報告とフィードバックを含む二人のコミュニケーションは主にメールで行った。そして、メールのやりとりは2017年5月から2018年12月まで24回にも及んだ¹⁾。筆者はSから多読記録を添付したメールが送られてくると、それをチェックし、本の難易度や読むスピードなどに関してフィードバックを返した。また、メールの中で、Sから質問があった場合には、できるだけ早く回答するようにした。また、毎回Sが多読記録を送るたびに褒め、多読を続けるよう励まし、何かあればすぐ質問するよう促した。

面談とインタビュー

メールでのやりとりに加え、20ヶ月の間に計4回筆者はSと対面で話をする機会があった。まずSから多読について相談したいというメールが送られてきて、初めて筆者の研究室で会ったのが1回目の面談だった。そこで、彼女は過去に多読に失敗した経験を筆者に語り、再挑戦するためのアドバイスを求めた。筆者は彼女の話聞き、Sの読書レベルはCEFR A1程度と判断し、「易しい本からスタート(Start with Simple Stories (SSS))する多読法(古川, 2021)」にもとづき多読を一からやり直す必要があることを説明した。SSS多読法は、多読はごく簡単なGraded Readers(英語学習者用段階別読み物)やLeveled Readers(英米児童向け学習用段階別絵本)から読み始め、徐々に長くレベルの高い本に移行していくという方法である。この最初の面談時に、筆者はSにリーディングログ用紙を渡し、易しい本の多読を25冊ほど読み終えたらその多読記録を持参して再び会いに来るようにアドバイスした。2回目の面談は、1回目から約1ヶ月後に前回指示した多読記録を確認するために行われた。Sは25冊の本を読み、その多読記録を持参した。しかし、多読記録に漏れが多く、多読のスタートとしては易しくないレベルの多読本を選択してい

1) 本事例研究に関しては、本人の同意を得たうえでデータを使用しているが、Sのメールにはプライベートな事項も含まれていたため、要約で紹介し、それに対する筆者のメールは基本的にそのまま記載している。

たので、次は YL0.3²⁾ 程度の多読本を100冊読み、その記録を見せるようにアドバイスした。3 回目は 9 月に図書館で彼女が多読本を選んでいるときに偶然に会って立ち話の形だったが、筆者は図書館に配架されたばかりの新しい多読シリーズや多読用 CD を紹介した。4 回目はこれまでとは異なり、筆者がインタビューの実施を提案した。S が大学を卒業する 3 カ月前、つまり多読を始めてから19カ月後に、筆者は彼女にメールを送り、多読の経験をインタビューさせてほしいと提案した。そして、S からインタビューの同意を得て、約 90 分の半構造化インタビューを実施した。事例研究は理論的スキームから恩恵を受けるため (Yin, 2014)、リーディングエンゲージメントモデル (Guthrie & Wigfield, 2000) の学習・知識目標、実社会との相互作用、自主性支援、興味深いテキスト、ストラテジー指導、協力、報酬と賞賛、評価、教師の関与の 9 要素に関してインタビュー質問を準備した。

データ結果

多読記録

S が初めて提出した多読記録 (面談 2 回目) は、日付、読了語数、レベルなどの情報が不足していた。また、読んだ本のレベルもバラバラで、アドバイスした「易しい本から読み始める」が十分に守られていなかった。そこで、次は YL0.3 レベルの本を100冊以上読むように具体的にアドバイスした。そして、その約 2 ヶ月後に、彼女はアドバイスに従っ

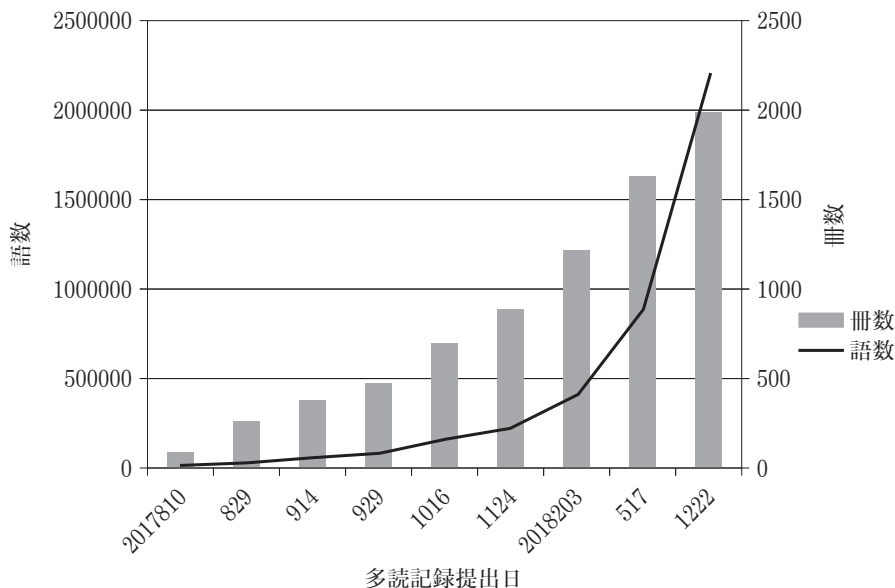


図 1 累積読了語数と冊数

2) YL とは Yomiyasusa Level のことを指し、多読本の難易度を示す。数字が小さいほど易しい本であることを示し、最も易しい本は YL0.0 である。例えば、10000 語程度の子どもの本で YL3.0、大人向けのペーパーバックで YL7.0 程度とされる。詳細は https://www.seg.co.jp/sss/YL/What_is_YL.html を参照されたい。

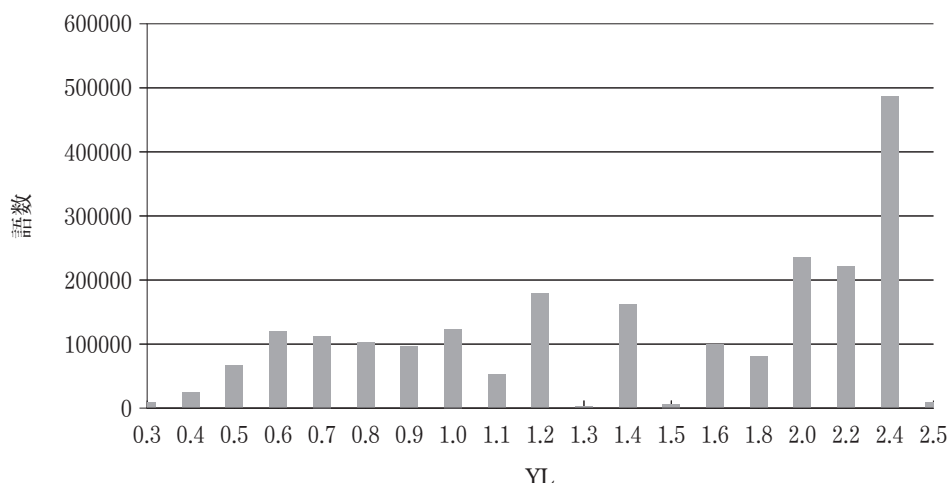


図2 YLごとの読了総語数

た新たな多読記録を筆者にメールで送ってきた。その後、多読記録は不定期に、だが着実に送付されるようになり、最終読了読書量は2,191,609語(1,990冊)に至った。

図1は2回目の面談時のアドバイスを受けた後の多読記録である。送付された2017年8月10日からインタビュー当日(2018年12月22日)に持参した最後の多読記録まで16か月間にSが読んだ累積読了語数及び読了冊数を示している。この図1から明らかのように、易しい本を100冊以上読むという多読方法に軌道修正してからSは順調に読了語数を伸ばしているのがわかる。

図2は、SのYLレベルごとの読了総語数を示したものである。Sは最初に非常に易しい本(YL0.3, 0.4, 0.5)を合計で約10万語読んでいることがわかる。そして、YL0.6からYL1.0までは、各レベルで約10万語ずつ読み、YL1.0までに、50万語以上読了していた。YL1.1から1.6までは、図書館に該当レベルの本があまりないため、以前のようにレベルごとの読書量は伸びなかったが、YL1.1と1.2, YL1.3と1.4, YL1.5と1.6の2つのレベルを合わせるとそれぞれ10万語以上読了していた。YL1.6レベル以上では、さらに図書館の該当本が少なくなるため、YL1.8で10万語程度、YL2.0と2.2で20万語程度を読んだ。さらに、YL2.4では、1冊の本の語数が6000~10000語程度と長くなるため、YL2.4だけで合計50万語近くを読んでいる。

英語力の変化

Sの英語力の変化については、インタビュー(面談4回目)でS自身が多読を実施して大きな成果を感じていた。第1に、英語の本を困難なく読むことができるようになり、卒業後も多読を継続したいと考えるようになっていた。多読開始から19ヶ月後のインタビューの当日、Sは当時読んでいたグレーデッドリーダーの*New Yorkers*(Oxford Bookworms Library, YL2.6, 5895 words)を筆者に見せ、多読を始める前は、500語程度の本を

読み終えるのも大変だったが、インタビュー実施当時は5000語程度の英語の本を1時間程度で2冊連続して読むことができたようになったと語った。第2の成果は多読を実施しただけでTOEICスコアがアップしたことである。Sは多読を始めて1年後の2018年6月、約100万語を読んだ時点で、TOEIC L&R テストを受験し600点以上を獲得した。この時、彼女はテスト対策に時間を割くこともせず、また大学で英語の授業も受けていなかったもので、本人によるとこの得点はひとえに多読の効果であると述懐した。なお、この点数は、10カ月間留学した日本人大学生のTOEIC平均点606点とほぼ同じである。(西澤, 吉岡, 伊藤, 深田, & 長岡, 2008)。さらに、Sは多読を始めて海外に行ったときに、以前よりスムーズに英語でコミュニケーションが取れるようになったと実感したという。また、外国人の友人と英語でチャットをするときに、ライティングの能力が向上していると述懐した。

Sの多読に影響を与えた要因

では、Sが授業外で自発的に多読を続けることに成功したのは何が要因となったのだろうか。Guthrie and Wigfield (2000) のリーディングエンゲージメントモデルは、リーディングの発達には、エンゲージドリリーディングが大切であり、学習・知識目標、実世界での相互作用、自主性支援、興味深いテキスト、ストラテジー指導、協力、報酬と賞賛、評価、教師の関与といった9つの要素が多面的に影響すると主張している。このモデルに基づきこれらの9つの要素についてSのインタビューで質問したところ、Sの多読の成功をもたらした要因として次の5つが示唆された。

1. 教師の関与
2. ストラテジー指導
3. 褒美と称賛
4. 実世界での相互作用
5. 興味深い本

上記の1. 教師の関与、2. ストラテジー指導、3. 褒美と称賛はすべて指導者にかかわることなので、ここではこれらをまとめて教師の役割として紹介し、次いで実世界での相互作用、興味深い本の順に紹介する。

1. 教師の役割（関与、褒美と称賛、ストラテジー指導）

インタビュー（面談4回目）でSは指導者の役割が非常に重要であり、多読の初期段階で多読の知識と経験が豊富な筆者から適切なアドバイスを受けることが多読を継続できた不可欠の要素だったと振り返った。Sは以前に、独力で多読を実施したが続かなかったという。この最初の多読の試みは、当時の英語授業担当者から図書館でたくさん英語の本を読みなさい、と言われたことがきっかけだったが、具体的なアドバイスをもらえず挫折したと振り返った。一方、今回はほとんどがメールでのやり取りであるが、筆者に多読記録を確認してもらえることができ、いつでも質問ができ、疑問点も解決できたので躊躇な

く多読を進められたという。以下のメールは面談2回目に易しい本から再挑戦するように筆者から助言を受けたのちSが初めてメールで多読記録1 (YL0.3 読了冊数92冊, 読了語数8609語) を送ってきたときの際の筆者の返信メールの抜粋である。

頑張ってたくさん読みましたね。今回アドバイスに従って易しい本を選んだのは良かったと思います。次はYL0.4に移りましょう。ただし、0.4レベルになるとやや長めの本もあります。多読レポートを見れば100語程度まではとても速く読めていますが、100～150語くらいになるとややペースが落ちています。これは現時点ではややリーディングスタミナが十分でないことを示唆していますので、YL0.4では200語までの短めの本を選んで読むようにして下さい。また、がんばりでレベルアップするというだけではなく、しんどい時は短い本、易しいレベルに戻って構いません。一日10分でもいいのでできるだけコンスタントに読みましょう。図書館にはCD付の多読本もあります。これらのCDを聴きながら本を読むのもお勧めします。なお、(リーディングログの) コメントは英語で書いていますが、日本語でも構いません。

このメールのアドバイスに対してSは読み方の何が問題で、どうすべきかが具体的にわかり、今後多読で意識すべきことが明確になったと返信メールで述べている。そして、さらに「同じ本にもう一度戻って読んでも大丈夫でしょうか？ひとつ手前の易しい本を既に読んでしまってももう一度そこから始めるということも可能でしょうか？」とさらに質問を寄せた。それに対して、筆者は次のように返信した。

前に戻って読むことももちろんOKです。お気に入りの本を見つけて何度も読み直している学生もいます。がんばってください。

インタビュー(面談4回目)でSは多読記録をメールで送ると、数日以内に(時にはその日のうちに)感想やコメントが筆者から返却され、その内容は「よく本を読んだね!」、 「感心しました」など、とてもポジティブなものばかりだったのが励みになったと明らかにした。一言のコメントでも褒められると嬉しかったというのがSの感想で、これらの称賛のフィードバックは、多読を続ける意欲を失わないために非常に役立っていたと述べた。

指導者の役割は、本人のやる気をサポートすることにとどまらず、Sのリーディングストラテジーの指導にも及んだ。例えば、Sは筆者に相談に来る前に実施した多読で、YL0.6程度の多読本を読み始めたが、読み続けることに困難を感じ、断念した経緯があった(面談1回目)。筆者を訪れ、多読を再スタートした今回でもSが最初に選んだのはYL0.6レベル(500～600語レベル)の本であったが、YL0.3程度の本をまずは100冊読むように具体的なアドバイスを受けたので、そこから再度スタートした。そして、勧められたアドバ

イスに従い少しずつ読む本のレベルを上げていき、同じレベルの本がほぼ一定の速さで読むことができるようになるまであせらずに読み続けた。結局それが功を奏したとインタビュー（面談4回目）で述べた。以下にSから送付された多読記録2（YL0.4 総読了冊数265冊，総読了語数30761語）に対して，筆者が返信で少しずつレベルを上げるようにアドバイスした際のメールを記す。

とてもたくさん読みましたね。200語程度にもずいぶん慣れてきたようです。次はYL0.5で300語まで読んでいきましょう。レベルを上げるときは、まずはORT（Oxford Reading Tree）を読み始める、少し長さに慣れてきたら他のシリーズを読むようにするといいです。（すでに、今回もそのようにできていましたね。）しんどいと感じたら、100～200語の本を時々交えて読んでもいいです。このレベルあたりは、同じYLでもやや長めの本があったり、読みにくいと感じる本があったりしますが、自分が読める本をできるだけたくさん読んでいきましょう。たまた、YL0.4に戻ってもまったく構いません。簡単なメモでいいので、今どんなふう感じて読んでいるのか、レポートの冊数の横に時々記録しておいてもらえるとありがたいです。例）このシリーズにはまる、いまいち、楽になってきた、疲労、とか。また、リスニングをしたときはLと書いておいてください。右肩上がりで実力がつくのではなく、アップダウンを繰り返すことで実力はアップしていきます。読んだら、またレポートを送ってください。

多読開始後、50000語程度を読了した頃には、Sは総語数300語程度までは無理なく読めるようになった（多読記録3 YL0.4-0.5, 読了冊数379冊，読了語数30761語）。Sは途中で挫折した一度目の多読の際には、ひたすら語数に関係なく順番に読んでいてとても大変だったが、今回はアドバイスをもとに易しい本から進めているので負担でないとメールに感想を寄せていた。しかし、読むスピードが速すぎるいわゆるとばし読みをしてしまう傾向があったので、その対処法として筆者はSに、感想の代わりに読んだ直後に本の中で記憶に残った内容語（動詞や名詞など）を10語程度、リーディングログに書き込むようアドバイスした。内容語をしっかりと記憶しようとする必然的に読むスピードにブレーキがかかるようになる。その結果、彼女はEFL多読初級者としての適切な読書速度、つまり1分間に100～130語のスピードで本を読むことができるようになった。以下は、そのアドバイスを送った時のメールである。

とてもいい気付きをして読んでいます。
そう、多読は「しんどい」と思ってもがんばって読み続けてもあまり英語力は伸びません。逆に今回のように、しんどいと思ったらレベルを下げ、易しい本にする、一度休憩を入れる等「自分が快適・楽しい」と思えるような読み方をしていくことがとても大事です。日本の教育環境では、「しんどくてもがんばりぬく」こ

とが賞賛されてきたと思うので、良い子の学習者がつまずきやすい点ですね。英語の難易度だけでなく、登場人物の数やキャラクターも読みやすさを左右します。だから、感想に書いてくれたことはとても自然なことです。リーディングスタミナも徐々につけていくことが大切です。次はスタミナをつける為に、YL0.4～0.5レベルの本で語数が400語くらいのを数多く読みましょう。図書館には秋学期よりこのレベルの本をたくさん入れてもらっています。感想・メモの欄ですが、一度次の方法を試してみてください。

1. 本を読み終える
2. 本を見ないで、文中に出てきた単語を5～10語程度思い出して記入する。

例) dog, wash, day...

単語をrecallしようと思うと、頭を総動員して読むことになります。「とばし読み」を防ぐ方法です。最初は読むスピードが落ちるかもしれませんが、気にしないで進めてください。間もなく秋学期が始まりますが、レポートはいつでも送ってください。

次のメールはSが上記のアドバイス後に多読記録4 (YL0.4-0.5, 総読了冊数475冊, 総読了語数81095語) を送ってきた際の筆者の返事メールである。

たくさん読んでいますね。単語を思い出す方法に変更したのは良かったようです。速さも必要だけど、単語が記憶に残る程度にきっちり読んでおくことも大切です。この調子でいきましょう。そろそろ500語の長さに進んでもいいと思います。レベルはYL0.5か0.6ぐらいでしょうか。修行ではないので決して無理はしないで。面白くない本があるのも当然です。FUN! と思える本を読んでいきましょう。Keep reading! また読んだら送ってください。

15万語程度を読了し、YL0.5-0.6程度の本を読むようになると、Sは今までとは異なり目安の時間内に読み切れないもどかしさを感じるようになった(多読記録5 YL0.5-0.6, 読了冊数698冊, 読了語数155118語)。それに対して、筆者はまず、15万語を読了したことを褒め、具体的な読み方のアドバイスをメールで返信した。

15万語に到達しましたね。

中学・高校の6年間で教科書では3万～5万語しか英文に触れていないので、これはすごいことです。さて、YL0.6前後で壁を感じる人は多いようです。自分で読めていないと感じたら、易しめのレベルを選んで読みましょう。Sさんのメールに書いてあるように今のレベルを続けてください。あるいはORT (Oxford Reading Tree) シリーズを最低2回ずつ読むのもお勧めです。時には、もっと難しい本を読みたいと思ったら、上のレベルの昔話シリーズにチャレンジしてみま

しょう。ストーリーを知っているので、読みやすいはずです。

ICR (I Can Read) シリーズは本ごとにトピックがコロッと変わるので、その意味では読みにくいかもしれません。そういうシリーズがあっても構いません。自分の好きなシリーズはありますか？ちょっと気弱になったら、お気に入りのシリーズを読みましょう。あと、一日に大量の本を読むと、1冊ずつは短くともリーディングスタミナが足りなくなることもあります。自分の適量のリーディング量を上手に見極めてくださいね。Happy reading! また、記録を送ってください。楽しみにしています。

Sは読了語数が20万語を超え、YL0.6レベルの本に達していたが、そのままYL0.7に進むには語数が1000語近いものが多いため不安を感じ、このままのレベルを続けるべきかどうか迷っていた(多読記録6, YL0.6, 読了冊数886冊, 読了語数218696語)。一般的にYL0.6に達した頃に、多読経験者は壁を感じる人が多い³⁾。それに対する筆者の返信メールが以下のとおりである。

20万語越え、おめでとう！

YL0.6レベルはもうOKだと思いますが、長めのリーディングに少しずつ移行していくことが必要なようです。その意味で、1000語レベルにすぐ進まなかったのは正解です。YL0.7程度で語数が600～700語を中心に読み進めてください。自分でもそろそろ「集中して読むことができる時間や長さ」が分かってくるころでしょうか。「ちょっとしんどいかな」と感じたら、いつでも短めの本に戻ってください。Keep reading!

その後、2か月ほどSからのメール連絡は途切れたが、Sは着々と多読を進めていた。そして、40万語を読了して読書記録をメールで再び送ってきた(多読記録7, YL0.7-0.8, 総読了冊数1220冊, 総読了語数409539語)。Sは、YL0.8程度を読了し、語数が900語の本にも慣れてきて自分が快適に読むことができる英語の本の選択ができるようになったと述べた。それに対して筆者は最大限の称賛メールを返した。

続けて頑張っているようですね。40万語を超えました。素晴らしいことです。
(後略)

こののち約3か月間はSからメールでの読書記録の報告や多読に関する質問はなかった。ひとつにはSが4回生になったことで就職活動シーズンが始まりS自身が多忙になっ

3) 多読が停滞することが多い3つの段階(YL0.6, YL2, YL3の壁)があることが知られている(古川, 2018)。

たためとSは後にメールに書いてきた。しかし、自分で多読は続けておりそののち80万語を読了し、YL1.4, 総語数1500語程度の本まで進んだ読書記録を送ってきた(多読記録8, YL0.8-1.2 総読了冊数1630冊, 総読了語数875354語)。そして、最近本のストーリーの内容によっては語数の多さが気にならなくなったとメールで述懐した。それに対する筆者の返信メールが以下のとおりである。

たくさん(87万語!)読んでいますね。たくさん読むだけでなく自分の読みをちゃんと判断しているのは素晴らしいことです。

(Sのメールで「1500字程度の本はもう一度読み直してみようかと考えています。」と書かれていたことに対して)

自分でそのように感じたなら、読み直してみてください。きっと発見があるはずです。このレベルになると「好きなタイプの本でレベルを上げていく」スタイルになります。Sさんが内容で気に入っているのはどのシリーズかしら?どんなストーリーが好みでしょうか?日本語の本でも好みがあると思いますので、次回はそんな感想も聞かせてください。次も報告を待っています。また読んだら知らせてください。

この後、6か月ほどSからは音信がなかった。元々Sが自主的に望んだ多読のためのやりとりであり、Sにとり4回生という将来を決定する大事な時期でもあったので、筆者からこの間に特にSに連絡を促すことはしなかった。しかし、卒業まであと数か月となり、筆者もSの進展が気になり、近況が知りたい旨のメールを送った。そして、インタビューを実施することが決まり、12月半ばに実施した。Sがその時持参した多読記録9はYL1.2-2.6, 1990冊, 2191609語に達していた。

実世界での交流

多くのEFL学習者は、教室外で英語を使う機会はほとんどないが、Sはインターネット上で外国人の知人とつながっており、その交流の中で多読の効果を実感していた。多読で身につけた単語やフレーズは、インターネット上で文章を書いたり話したりするときに、簡単に使えるようになった。特に、100,000語以上読んだあたりから、英語でのおしゃべりのスキルが上がってきたと感じるようになったという(面談4回目)。「聞く」、「読む」、「話す」、「書く」の順で、「聞く」が先に伸びているという実感があったが、多読で書くことはなかったにもかかわらず「書く」力が伸びていると感じたことに、S自身が驚いていた。

興味のある多読本

Sが筆者の助言を受けながら多読にチャレンジした時、すでに大学図書館には5000冊以上の絵本とグレーデッドリーダーの蔵書があった。これらの多読本の裏表紙には、YL,

レベル、本のシリーズ、語数を示す多読シールが貼られ、多読専用書架に YL レベル別に配架されていた。さらに、多読の一部の図書を禁帯出の館内利用専用図書に指定し、貸し出し中の本が増えても図書館ではいつでも多読の図書にアクセスできるように配慮されていた。多読を実施する際に、学習者が面白い本にアクセスできることは必須であるが、本の好みは個人差があり、学習者によって読書の好みは異なる。そこで、図書館には、フィクション、ノンフィクション、童話、アニメ、絵本など、できるだけ多くのバリエーションの多読本が配架されていた。また、登場人物の名前などなじみのない固有名詞が多いと読みにくい一因となるため、同じ登場人物が活躍するシリーズ本も多く導入されている。これらの多様な多読本の存在により、S はメールでアドバイスを受けるだけで多読にアクセスできたと述懐した（面接 4 回目）。

4. まとめ

本稿では、1 年半にわたって教室外で 200 万語の多読に成功した大学生の事例を紹介した。過去に独力で多読に挫折した経験を持つ本研究の事例対象者は、筆者のメールでのフィードバックを受けながら、成績や単位と関係なく自らの意思で多読を 16 ヶ月間続けた。彼女は「多読は易しい本からスタートする」という方針のもと多読を実施したが、これは SSS 英語学習法研究会の「非常に易しい本からはじめて、旧来の多読法の 10 倍以上の種類の本を使うことにより、従来の多読の 10 倍以上の量の英語を読む多読法（古川, 2021）」に基づくものである。SSS の多読法の効果については古川（2021）は、以下のよう

「100 万語読んでやっと（旧来の多読の出発点であった）PGR⁴⁾ 2-3 レベルに進む位のゆっくりさです。しかし、無理なく基礎力が付き、早い段階から「読む楽しさ」を味わえるので、従来の多読法と違い、年間 100 万語～200 万語読むことが十分に可能です。実際、SSS 式多読により、1 年間で 500 万語以上読んだ人も続出しています。はじめはゆっくりなのですが、1 年後、2 年後の成果では、今までのどの多読法よりも、また精読法よりもはるかに高い効果を得ることができます」

本研究の事例対象者も 100 万語時点では PGR2-3 レベルよりもさらに易しい YL1.4 レベル（Usborne Young Reading 1, Pearson Active Readers 1, Fast Forward Level 12 など）を読んでいたが、この方針に則り易しい本から少しずつレベルを上げて多読をすすめていた。そしてそれが今回の多読成功につながった大きな一因ではないかと考えられる。

さらに、本研究で SSS の多読法とともに対象研究者の多読を支えたのは、リーディングエンゲージメントモデル（Guthrie and Wigfield, 2000）の複数の要素（教師の関与、ストラテジー指導、褒美と称賛、実世界での相互作用、興味深い本）があったことが示唆さ

4) Penguin/Pearson English Readers の略語

れた。その中でとりわけ指導者の果たす役割は大きく、多読へのモチベーション維持に貢献したほか、特に多読初期において本の選択、読むスピードなどに対する指導の大切さが明らかにされた。多読初期には、学習者は本の選択レベルや進め方などに迷いが生じることも多く、それに対する適切なアドバイスを指導者から得られるかどうかが多読を成功に導く大きな鍵を握ることが示された。

なお、本研究は非常に意欲的な学習者を対象にした事例研究であり、結果を一般化することはできない。しかし、本研究は易しい本からスタートするという多読のアプローチの有効性が改めて示されたほか、多読における指導者の役割の重要性が示された点で教育的示唆に富んでいると言える。

謝辞

本稿は2019年8月に名古屋工業大学で実施された The 58th JACET International Convention での発表に加筆修正したものである。本研究の執筆にあたり JSPS 科研費 19K00929 の助成を受けた。また、多読指導を実施するに当たり、大阪経済大学図書館の惜しみないご協力とご支援に対してここに感謝の意を表したい。

引用文献

- Al-Homoud, F., & Schmitt, N. (2009). Extensive reading in a challenging environment: A comparison of extensive and intensive reading approaches in Saudi Arabia. *Language Teaching Research*, 13(4), 383-401. doi:10.1177/1362168809341508
- Barber, K. S. (2014). Reading for pleasure: More than just a distant possibility? *TESOL in Context*, 24(1), 45-66.
- Beglar, D., Hunt, A., & Kite, Y. (2012). The effect of pleasure reading on Japanese university EFL learners' reading rates. *Language Learning*, 62(3), 665-703. doi:10.1111/j.1467-9922.2011.00651
- Guthrie, J. T., & Wigfield, A. (2000). Engagement and motivation in reading. In P. D. Pearson, R. Barr, & M. L. Kamil (Eds.), *Handbook of reading research, vol. III* (pp. 403-422). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Hafiz, F. M., & Tudor, I. (1989). Extensive reading and the development of language skills. *ELT Journal*, 43(1), 4-13.
- Iwahori, Y. (2008). Developing reading fluency: A study of extensive reading in EFL. *Reading in a foreign language*, 20(1), 70-91. <http://files.eric.ed.gov/fulltext/EJ791535.pdf>
- Lai, F. (1993). The effect of a summer reading course on reading and writing skills. *System*, 21(1), 87-100.
- Leung, C. (2002). Extensive reading and language learning: A diary study of a beginning learner of Japanese. *Reading in a foreign language*, 14(1).
- Mason, B., & Krashen, S. (1997). Can extensive reading help unmotivated students of EFL improve? *ITL Review of Applied Linguistics*, 9(2), 78-84.
- Mills, A. J., Durepos, G., & Wiebe, E. (2010). *Encyclopedia of case study research*. Thousand Oaks, CA: SAGE Publications.

- Mohammad, A. A. (2014). The effects of an extensive reading program on improving English as foreign language proficiency in university level education. *English Language Teaching*, 7(1), 28-35.
- Nishino, T. (2007). Beginning to read extensively: A case study with Mako and Fumi. *Reading in a foreign language*, 19(2), 76-105.
- Robb, T., & Kano, M. (2013). Effective extensive reading outside the classroom: A large-scale experiment. *Reading in a foreign language*, 25(2), 234-247. <http://nflrc.hawaii.edu/rfl/October2013/articles/robb.pdf>
- Robb, T., & Susser, B. (1989). Extensive reading vs skills building in an EFL context. *Reading in a foreign language*. <http://nflrc.hawaii.edu/rfl/PastIssues/rfl52robb.pdf>
- Tudor, I., & Hafiz, F. M. (1989). Extensive reading as a means of input to L2 learning. *Journal of Research in Reading*, 12(2), 164-178. doi:10.1111/j.1467-9817.1989.tb00164.x
- Yamashita, J. (2008). Extensive reading and development of different aspects of L2 proficiency. *System*, 36(4), 661-672. doi:<http://dx.doi.org/10.1016/j.system.2008.04.003>
- Yin, R. K. (2018). *Case study research: Design and methods* (6th edition). Thousand Oaks, CA: SAGE Publications.
- 古川昭夫. (2018). 「多読指導の3つの壁を「多読+ α 」で乗り切るための図書紹介」https://www.jera-tadoku.jp/workshop/2018-0804-From_YL0_to_YL3.pdf
- 古川昭夫. (2021). 「多読で英語に親しみませんか？」<http://www.seg.co.jp/ss/learning/>
- 西澤一, 吉岡貴芳, 伊藤和晃, 深田桃代, & 長岡美晴. (2008). 「豊田高専における英語多読授業の成果と課題」http://jera-tadoku.jp/papers/nishizawa_0816.pdf